

第4節 江戸時代

1. 概況

江戸時代の教育は、士農工商の身分制度を色濃く反映したもの（下記2～4）と、「士庶同学」的に展開される私塾（下記5）に大別して理解するとよい。そして、前者は代表的な藩校を覚えるようにし、後者は私塾を開いた人物名、教えるジャンル、塾名をセットで覚えていこう。

2. 昌平坂学問所

幕府直轄の最高教育機関が**昌平坂学問所**である。幕府教育の中枢であり、多くの優位な人材を幕府や藩に輩出した。とはいえ、江戸時代通じて昌平坂学問所という名称で存在していたわけではない。もともとは、林家の家塾であり、これが5代綱吉の頃に聖堂学問所として整備され、寛政の改革期に幕府直轄として昌平坂学問所となったのである。

なお、幕府直轄の教育機関はこれ以外にも、国学研究を行う和学講談所（**塙保己一**）、西洋の語学や文化を研究する蕃書調所、和漢医学が教授される医学館、西洋医学を学ぶ西洋医学所、などがあった。

3. 藩校

図表1－1にまとめた藩校名をしっかりと覚えておこう。

図表1－1 教員採用試験で問われやすい藩校

秋田藩 → 明德館	水戸藩・佐賀藩 → 弘道館	土佐藩 → 教授館
庄内藩 → 致道館	尾張藩・加賀藩 → 明倫堂	熊本藩 → 時習館
米沢藩 → 興讓館	岡山藩 → 花叢教場	薩摩藩 → 造士館
会津藩 → 日新館	長州藩 → 明倫館	

なお、岡山藩には、**熊沢蕃山**が構想し、藩主の池田光政が開いた**閑谷学校**というものがあるが、これは藩校ではなく、郷校である。なお、藩ごとに違いはみられるが、概ね、藩士として家格がしっかりしている子弟が学ぶところを藩校といい、下級武士なども学べる場を郷校という。

4. 寺子屋

庶民を対象とした教育機関が寺子屋である。現在の小学生程度の年齢になった子が通い、「読み・書き・そろばん」を習得する。この教育効果は高かったため、江戸時代の庶民の識字率が世界的に見ても高水準だったといえる。また、幕府や藩などが法度・触書・高札によって命令や指示が行われても庶民に伝わるし、貨幣経済の浸透にも役立ったと考えられている。

5. 私塾

図表1－2に、教員採用試験に問われる私塾と、その塾にまつわる著名人（主には塾を開いた人物）、教えるジャンルや特徴などをまとめた。教員採用試験の日本教育史の頻出といえる部分であるため、しっかりおさえておこう。

図表1－2 教員採用試験で問われやすい私塾などについて

塾名 (場所)	関連人物	ジャンルや特徴
藤樹書院 (近江)	中江藤樹 (1608～1648)	漢学。中江藤樹は開塾者。彼は、王陽明の知行合一に共鳴しており、日本の陽明学の祖といわれる。代表著書は、『翁問答』。青少年を教育したことから近江聖人と称される。
古義堂 (京都)	伊藤仁斎 (1627～1705)	漢学。伊藤仁斎は開塾者。彼は、古典を直接精読する（後代の注釈は排す）姿勢を重んじる古義派の儒学者。代表著作は『論語古義』『語孟字義』『童子問』。
菰園塾 (江戸)	荻生徂徠 (1666～1728)	漢学。荻生徂徠は開塾者。彼も仁斎同様に古義派の儒学者だが、古文辞学という近代的な古典解釈方法を取り入れた点に特質がある。天下泰平のために儒学を用いる考えから『政談』を8代将軍吉宗に提出している。
嚶鳴館 (江戸)	細井平洲 (1728～1801)	漢学。細井平洲は開塾者。彼は、上述の米沢藩の藩校である興讓館の命名者であり、尾張藩藩校の明倫堂では学長を務めた人物である。嚶鳴館は彼が若いときに開いた塾である。

鈴屋 (松坂)	本居宣長 (1730～1801)	国学。本居宣長は開塾者。『古事記伝』『玉勝間』『源氏物語玉の小櫛』などを著した国学の大成者。鈴屋は、宣長の自宅で開かれた塾である。
気吹舎 (江戸)	平田篤胤 (1776～1843)	国学。平田篤胤は開塾者。彼は、国粹主義的な神道論（復古神道）で有名。これは、宣長らの国学にみられる実証性よりも、日本人という民族意識を抱かせる特徴を持つ。
心学舎 (京都)	石田梅岩 (1685～1744)	儒学・仏教・神道の融合された平易な生活哲学を教える。ちなみに、これを心学（石門心学）という。石田梅岩が開塾者。彼は封建的な身分秩序は社会的分業の仕組みとしてあるだけと考え、「商人の売利は士の禄に同じ」と主張した。また、「知足安分」の町人道徳や「先も立ち、我も立つ」互助精神が商いの道だと説いた。
咸宜園 (豊後)	広瀬淡窓 (1782～1856)	漢学。広瀬淡窓は開塾者。この塾は、士庶同学が徹底していた。具体的には、「三奪」と呼ばれる年齢・家格・修学の程度によらない運営がなされていた。また、成績表は「月旦評」という評価・公表を伴うものが用いられた。
鳴滝塾 (長崎)	シーボルト (1796～1866)	洋学。医学や自然科学、動植物学が教授された。シーボルトが開塾者。
適塾 (大坂)	緒方洪庵 (1810～1863)	洋学。医学や物理など。緒方洪庵が開塾者。この塾は、猛烈な学習をすること、原書主義であることを特徴とする。福沢諭吉が学んだことでも有名。
松下村塾 (萩)	吉田松陰 (1830～1859)	漢学。吉田松陰の親戚が開塾者で、吉田松陰はこれを引き継いだ。この塾からは、幕末維新に活躍した人物が多数輩出されている。

第5節 明治～第二次世界大戦敗戦まで

1. 概況

教員採用試験において、本節に関わる事項をおさえるためには、次の2点の区別から始めるとよい。第1は、公教育制度がどのように整備されたかである。より具体的には、どのような政策を通じて、どのような学校が整備されていったかという制度史の範疇に入るものである。本テキストでは、2にそれをまとめている。第2は、この時期の教育思想家や実践家の人物名と主義主張の理解である。こちらは3にまとめている。

2. 教育制度史

(1) 明治維新～教育勅語制定まで

1871年……文部省設置

1872年……「学事奨励に関する被仰出書」

→国民皆学、学問で自身が身を立てることを奨励（個人主義）、功利主義が柱。

1872年……**学制**発布、師範学校成立

→全国に8つの大学、256の中学、5万3760の小学校をつくる計画。

→小学校は修業年限4年ずつの下等・上等小学校。

→中学校は修業年限3年ずつの下等・上中学校。

1877年……東京大学設立

1879年……**教育令（自由教育令）**の公布

→授業料徴収、長い修学期間などの反発で修学率4割にとどまる学制を廃止し、制定。

→自由主義的で地方分権的な教育を目指す。

→推進者は、**田中不二麻呂**とアメリカ人の**モルレー**（アメリカを参考に行っている）

→**毎年4か月、4年で修了**という教育年限にし、町村が学校を設置する形式。

1880年……**改正教育令**の公布

→前年の教育令では公立学校の低下とさらなる就学率低下を招いたため、制定。

→小学校の修学年限は3～8年とし、**就学義務は毎年16週以上3年間**とした。

→前年に**元田永孚**がまとめた『**教学聖旨**』の影響あり、**修身**科目の重視化。